

【 10 】

氏名	吉田新吾 よしだしんご
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第11号
学位授与の日付	昭和39年9月29日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	チヨ－サー研究

論文調査委員 (主査) 教授 中西信太郎 教授 御興員三 教授 菅 泰男

論文内容の要旨

学位請求の主論文「チヨ－サー研究」は、チヨ－サーの作品に見られる、地上的な愛、神の愛等さまざまな愛の姿を中心問題として取りあげ、それを広く中世ヨーロッパ文学および中世キリスト教思想との関連において把握すると同時に、また、そのチヨ－サーにおける独自の様相を明らかにしたものである。

チヨ－サーが、とくに比較的初期の作品において、フランスの抒情詩、ロマンスおよびアレゴリーから多くを学び、好んでその支配的な主題たるいわゆる宮廷的恋愛 (amour courtois) をえがくことにより、それまで立ち遅れていたイギリス文学をほとんど一挙にヨーロッパ的水準にまで高めたことは、諸家の指摘するとおりであり、著者もまた宮廷的恋愛の由来と意義とを探りつつ、それをイギリスに移入したチヨ－サーの功績を高く評価する。と同時に、著者は、チヨ－サーが単に宮廷的恋愛の既成のコンヴェンションに追随することなく、進んで新たな要素を導入し、独自の境地を開拓したことをも見落さない。

チヨ－サーが導入したもっとも重要な要素は、著者によれば、リアリズムである。それはチヨ－サーの全作品に偏在し、チヨ－サーの作品をして真に新たなものたらしめている要因であり、そのもっとも端的なあらわれを著者は「キャンタベリー物語」に含まれた数編のいわゆるファブリオー (fabliau) において見る。しかし、注意すべきは、その仮借なき現実暴露と辛辣な世相風刺とにかかわらず、全体としてこれらの物語の雰囲気はきわめて清澄、ほとんど汚濁を感じさせないことであり、著者は、そこにチヨ－サーのすぐれた良識と脱俗的な喜劇精神の反映を見る。しかも、その良識とその精神とは、より強固な思想によって裏打ちされている。それが明らかとなるのは、とくに「トロイルスとクリセイデ」においてである。

チヨ－サーのもっとも完成度の高い作品である「トロイルスとクリセイデ」が、忠実に宮廷的恋愛を写してポッカチオの原作よりもかえって中世的である反面、主要人物の迫真的な心理描写や、類型を脱した脇役の創造によって、またきわめて近代的であり、近代小説の始祖と目せられることがあるのも、チヨ－サーの現実主義の勝利としなければならない。と同時に、著者は、その現実主義の背後に潜むもうひとつ

の要素をも見逃さない。それは、著者によれば、チャーサーがボエティウスから学んだ思想である。ボエティウスの「哲学の慰め」が中世ヨーロッパ思想に多大の影響を及ぼしたことについては論を要しない。チャーサーもみずから英訳の筆をとっているほどであり、また、その全作品を通じて、直接間接「哲学の慰め」に言及している箇所は、数百箇所に上る。トロイルスとクリセイデの悲恋を支配するのは、気紛れな運命にほかならず、そのかぎりにおいて作者は主人公たちに惜しみなく、同情を注ぐ。しかし、より重要なことは、運命を越えたところに、作者がボエティウスにならって常に摂理の存在を意識していたことであり、そのことがこの作品にロマンス一般からぬきでた高さと深みとを付与していると著者は考える。

このように、宗教的な相のもとにチャーサーを見ることは、必然的に、他の宗教詩人との比較を招く。著者は、最後に、チャーサーとほぼ同時代のラングランドを取りあげて両者を比較し、チャーサーの特色の最終的な決定を試みる。それによると、同様にキリスト教的な世界像に依拠しながら、ラングランドの世界は、より暗く、より激しく、いわば、より清教徒的であるのにたいし、チャーサーのそれは、より明るく、より穏やかで、真に人間的であり、著者は、このようなキリスト教的ヒューマニズムこそチャーサーの真髓であると結論する。

論文審査の結果の要旨

チャーサーは、ヨーロッパ中世文学の最後をかざる大詩人であるが、「英詩の父」として、新興英文学の偉大な出発をしるしづける重要な地点に立っている。本論文は、そのようなチャーサー文学の持つ文学史的地位や、思想史的意味の分析解明に焦点をおいて、著者の多年にわたる研究成果を集大成したものである。全体として著者の所論は、すぐれて独創的であると言うことはできないかもしれない。また思想の抽出に急なあまりに、詩そのものはやや等閑視されているくらいがなくもない。けれども、著者が、プロヴァンスの抒情詩、クレティアン・ド・トロア等の手になるロマンス、あるいは「バラ物語」等、フランス中世の主要作品を直接検討し、進んでダンテ、ボッカチオ等ほぼ同時代のイタリアの作家をも渉猟するのみならず、さかのぼってアウグスティヌス、ボエティウス等、中世思想の淵源にまで分け入ることにより、チャーサーの作品に渾然として流れている思想を歴史的に分析し、体系的に提示した功績は、とくに本邦においては先例を見ないところであり、学界にたいする貢献はきわめて大であるとしなければならぬ。参考論文「愛の中世的伝統」は、チャーサー以後ミルトンにいたる英詩のなかにチャーサー的な愛の主題の発展と変遷とをあとづけたものであり、イギリスの詩においてチャーサーが占める位置を思想的に明確にした点において、主論文に劣らず貴重な業績である。よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。